

茅ヶ崎市立小和田小学校

研究テーマ：一人ひとりの「考えたい」をふくらませる授業づくり

1 実践の目的

(1) 児童の実態

本校の児童は、知識・技能に係る資質・能力が比較的高い傾向にある一方で「なぜそう思うのか？」について自分の言葉で表現する思考・判断・表現等に係る資質・能力に課題があると捉えた。また、自分の考えを表現する場では、「正解か不正解か」への意識が強く、教師が期待する答えを出そうとする姿も見受けられた。

(2) 目指す児童の姿

上記の実態から、思考・判断・表現等に係る資質・能力の育成、「友だちの考えをもっと聴きたい」「自分の考えをもっと伝えたい」「もっと考えたい」と、学びに対して主体性を持ち“自分ごととして”取り組む児童の育成を目指している。

2 実践の内容

(1) 実践の柱

「一人ひとりの『考えたい』をふくらませる授業づくり」をテーマに、「協同探究学習」を柱として授業研究を進めていくこととした。

(2) 協同探究学習について

協同探究学習では、授業者が教材の本質に迫り、「単元を通して高めたい力」「本時で高めたい力」を明確に設定する中で、児童の興味・関心や多様な考えを引き出すことのできる発問(導入問題)と、児童一人ひとりの思考を深める発問(展開問題)を軸に、授業をデザインしている。

(3) 協同探究学習の授業の流れ

本時で高めたい力を高めるために、以下のように授業を組み立てている。

①個別探究Ⅰ

導入問題について児童一人ひとりが多様にアプローチする。

②協同探究

児童一人ひとりの多様な考えをクラス全体で共有し、関連づける。

③個別探究Ⅱ

展開問題を通して児童一人ひとりが協同探究の成果を統合し、考えを深める。

(4) 授業づくりのために

本研究で作成した『授業構想シート』を活用して、本時で高めたい力を明確にし、発問を考え、協同探究でどのように教材の本質に迫っていくのか具体的にイメージするために、児童の発言の関連づけを考える。また、評価場面について、児童がどのような姿になっていれば高めたい力が高まったといえるのかを具体的に考える。

<授業構想シート記入例>

学級	6年	授業者	
教科	算数		
単元	分数のわり算		
1 本時で高めたい力(わかる力)を考える。			
数や図、言葉を用いながら筋道を立てて単位量あたりの大きさの求め方を考える力			
2 導入問題を考える。			
2/3Lで板を4mぬれるペンキがあります。このペンキ1Lでは何mぬれることができますか。			
3 関連付けの方向性をおさえる。			
O協同探究で気づかせたい点 かけたりわたりすることでペンキを1Lにしている。(1単位あたりの大きさ) そのためには、ペンキにかけたりわたりした数をぬれる量にもかけたりわたりしないといけない。(比例) O予想される児童の記述 →※別紙参照 O想定されるグループニング (1)わっている＆わけている 別紙①② → ÷2して1/3Lあたりにぬれる面積を求めている。(どちらも単位分数1/3Lにしている。1/3のときは何mぬれるか?) (2)わけていっている 別紙③④ → 分母をかけている(乗法的) 別紙⑤⑥、もとの数(2/3L)を2倍、3倍・・・している。(加法的) ↓その後に÷2をして... ☆1Lあたりにしている (3)わけていっている 別紙⑦ →逆数をかけている →整数にするため →☆1Lあたりにしている			
追究型発問：これらの考えすべてにつながることは何でしょうか。			
想定される児童の反応： ・ペンキの量が増えたら、ぬれる量も増える。(＝比例している) ・÷2、×3(または×3、÷2)をしている。 ・まず1/3Lにしている。 ・1Lにしている。			

(5) 研究授業

本校では、校内授業研究会における研究授業を各学年1本行っている。研究授業は、学年が母体となって研究しており、学年で代表1名が授業公開している。また、その他の学年職員は、研究授業の事前や事後に、検討している授業の公開を行う。その授業を毎回学年で参観し合い、参観から見取った事実(児童の姿)をもとにして、より『『考えたい』をふくらませるために』という視点で、さらなる検討を重ねている。なお、その中の1本は、「事前ブロック研究会」として、ブロック職員全員で参観と協議会を行っている。この事前ブロック研究会を通して、学年を越えた縦の学びを意識しながら、より多くの職員の眼で児童の学びの姿を見とり、それを共有していくことで、よりよい授業づくりを目指している。

(6) 協議会

参観者は、『授業構想シート』によって、授業の目標を共有し、授業者が1時間の中で高めたい資質・能力を明確に知ることができる。参観の際は、児童の「考えたい」がふくらんだ瞬間や、本時で高めたい力が高まっているかを、児童の発言やつぶやき、ワークシートやノートの記述内容などから見とる。協議会では、「児童も教師も協同的探究学習」を合言葉に、自分の言葉で語り合う。

3 実践の成果と課題

＜成果～児童の姿～＞

- ・一人ひとりが課題に向き合い、「正解」「不正解」ととられることなく、自分なりの考えをもち、様々なかたちで表現する資質・能力が身に付いてきた。
- ・協同探究において、他者と自分の考えを比較しながら話を聴こうとする資質・能力が身に付いてきた。

＜成果～教師の姿～＞

- ・「教材の本質」「単元や本時で高めたい力」が“授業の核”になることに気づくことができた。
- ・児童の実態に即した、一人ひとりの多様な考えを引き出せる問いを設定することができるようになった。
- ・児童の話を聴き、児童同士の考えをつなげたり問い返したりすることができるようになった。

＜課題～児童の姿～＞

- ・考えを記述できるようになったが、発言となると、一部の児童に偏ることがある。
- ・協同探究において、児童自ら他者の考えにつなげていくことが難しい。

＜課題～教師の姿～＞

- ・拳手の有無に関わらず、授業の流れやタイミングに応じて、様々な児童の考えを引き出す工夫が必要である。
- ・児童自らが、互いの考えのつながりに気づき、「教材の本質」に迫れるようなさらなる追究型発問の設定や板書の工夫が必要である。

4 今後の展開

本校の校内研究では、常に「目の前の児童の姿をもとにした」授業づくりに取り組んできた。今後は特に、より『『考えたい』がふくらむ』協同探究の研究を進めていきたい。児童一人ひとりがどのように考え、どのように言葉を紡いでいくのかを授業者がよく考え、言葉を受け止めたり問い返したりしながら、児童一人ひとりの考えようとす姿勢の高まりや考えの深まりを生み出していきたい。そのために、「“授業の核”を大切にしながら授業をつくる」ということ、実践と児童の様子を職員同士で共有することを日頃から繰り返し取り組んでいきたい。